
鬼が嗤った紅い空

珀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼が嗤った紅い空

【Nコード】

N9721W

【作者名】

珀

【あらすじ】

ある嵐の日。平和な万事屋にまたもや厄介事を運び込んできたのは銀時の旧友、桂小太郎。京では高杉が立ち上がり、幕府を倒すべく集まる攘夷志士。狙われる真選組に焦る銀時。鍵は宇宙をさ迷うが、天導衆を明かす闘いの幕は上がり、歯車は廻り出した――

＊週2日更新予定＊

序章 嵐の前の：

「ちょっと神楽ちゃん！ あっ 銀さんまで、まったく．．」

江戸はかぶき町、人情の街の一角に佇む万事屋では、従業員がオナーに呆れかえるというお馴染みの光景が繰り広げられていた。

しかし、今日に限ってはそれも仕方のないこと。あらゆる商店は軒並み休業。

寺子屋も飛脚も待機状態といった所か：

とにかく空からはバケツでもひっくり返したかのような大雨が降り続け、

何十年もこの街に息づいている大木が強風に煽られ、枝は葉も引きちぎられて窓に叩きつけられている。

先ほどから、この薄すぎる万事屋の窓は割れてしまούνじゃないかと心配するほどの音を立てて揺れている。

江戸中の人間がだらだらと退屈そうにこの今世紀最大の威力を誇るといわれる台風が過ぎ去るのを待っているだろう…

しかし、万事屋の家政婦兼従業員の志村新八に限っては、こんな日でもテキパキと家事をこなしている。

今は、昨日取り込んだあと台風に備えていなかった事に気づいて慌てて外に飛び出してしまった為に放置していた洗濯物を畳みながら他の従業員のだらけっぷりに注意を促すという母親奥義を駆使している訳だが…。

「おい新八イ、ジャンプ買ってこいよジャンプっ！　　ったくこんな日に昼寝くらいいいだろうーが！

あーなんかこねえかなっ　　なんか起きるんじゃないかなっ！」

「まじでかつ！？　　今日は暇過ぎるヨっ　　どんな事件もどーんといネっ！」

途端、台風が過ぎ去るのを煩くもただ待っただけだと思われた万事屋に

屋根を打ち付ける雨音のせいかやや控えめないいつも通りの間延びしたメロディが――

ピンポン ピンポン…

新たな事件の始まる合図が、鳴り響いた――

開幕 厄介な訪問者（前書き）

読んでくださってありがとうございます。

初小説からいきなり連載って… まだ話はすみませんが、宜しく願います。

開幕 厄介な訪問者

ザーアー

「新ハイ、そろそろ出てやれよ、こんな嵐の中わざわざ万事屋なんかにきたんだ、よっぽど困ってるんじゃないの？」

しつこいチャイムの嵐が降る万事屋の中、ソファアでだらしなく寛ぐ銀時。

に賛同するように銀時とは反対側のソファアで定春とじゃれていた神楽までもが、

「そうアル。私たちは台風を満喫してるから忙しいネ！ぱっつあんずーっといつも通り。ヒマなんでショ？さっさと行ってくるヨロシ」

家政夫、もとい新八は洗濯物を畳む手を止め、ぶつぶつ文句をい

いながら玄関に向かう。哀れ、慣れたものだ。

ずっと鳴り響いていたチャイムの主を迎え入れるように引き戸を開けつつ

「お待たせしてすみません。こんな嵐の中、どうかなさいましたか？
……」

バタンッ！

開けてすぐに扉を閉じたのだとわかる音が万事屋を揺らし、先ほど玄関に新八を向かわせた2人も訝しげに顔を見合わせ、のたのたと玄関へ向かう。

玄関の引き戸では新八と訪問者が決死の攻防戦を繰り広げているようで、ドタドタと小刻みに鳴っている。

仕方がないので新八を戦線離脱させ、いきなり抵抗がなくなったこととでつんのめった訪問者に銀時の蹴りが入った：

ドゴッ　ズルッ　と妙な音を立てて玄関外の手すりに頭を打ち付けた後、滑って静かに地面に着地したのは黒髪で長髪の

「ヅラっ!？」

「銀さん、聞いても無駄ですよ。桂さんもう伸びてます。厄介事に巻き込まれる前に帰ってもらおうかと思ったんですけどね…」

とりあえずこの嵐の日の厄介な訪問者を居間に引き上げ、お茶を勧めると息を吹替えし、やたらと真面目そうな口調で語りだした。

「ああ　新八くん、お茶ありがとう。というか銀時貴様、顔もみずに蹴ってくるとはどういうことだっ

まったく、せっかくこの嵐の中、わざわざ情報を持ってきてやっ

たというのに…」

片腕を組み、頬杖をつくようなポーズでわざとらしくため息を吐く桂に、若干苛立ったような銀時の言葉が続く。

「マジで面倒事かよ…っ勘弁してくれ。つつつても、おめえがどうしようもない馬鹿だってことは知ってるが、こんな嵐 중이다。よっぽどの事だろう？幕府か、高杉関連か、宇宙のゴタゴタかあ！？真選組に追われている、なんていわせねーぜ？」

「まてまて銀時ッ 断じてあの犬共などではないっ というか、奴らもこの嵐の中じゃおとなしく息を潜めている…
そうだ。動き出したのは、天皇だ。」

「「「はあっ！？」」」

うってかわって静まり返った万事屋に、桂が茶を啜る音だけが響い

て
いた
：

開幕 厄介な訪問者（後書き）

…さあ、幕は上がった。

初動 天皇方の思惑（前書き）

3話目でこのスピードはないと思いますが…少しずつ、回り始めます。

初動 天皇方の思惑

「てっ 天皇が動き出したって… 天皇なんていたんですかっ？」

最初に口を開き、禁句を放ったのは新八だった。ちなみにこの世界でもちゃんと天皇は居るって事で話を進めます。

「おいおい新八ィ、いくらなんでもそりゃないだろ。今ではお飾りとしか言いようがないが、まあ居るぜ」

「そうだ。今では新八君が知らない程に影が薄くなっている。幕府からの援助でなんとか成立していす訳だからな。だが、本来我らが掲げる攘夷とは、尊皇攘夷といって幕府から天皇に政権を奉還させ、天皇中心の国家を作るものなんだ。つまり、幕府は敵で天皇は見方になってもらわねばならない。

天皇ほど影響力のあるお方なら、国民も反乱することなく新しい政についてきてくれるだろうからな。」

とりあえず真剣な顔をして聞いていた3人だが、話があまりにも長いので桂が律儀に持ってきた茶菓子をくわえながら頷く。

「ふーん、じゃあその天皇とやらから攘夷軍に号令でもかかったのか？私を保護し、いざ幕府を討たん！みたいな感じなんだろ」

「えっ じゃあ桂さん達もそれに参加するんですか？それで、万

事屋になんの用ですか…」

ジト目で桂を眺める万事屋3人にもめげず、桂は話し出す…

「それで、その天皇の号令なんだが、彼もなんだって幕府勢を皆殺しにしたいのではない。政権の奉還…幕府の消滅さえすれば良いんだ。そこで、我々攘夷軍の中ではやはり將軍の説得から変えていけたら…そう思っているんだ。だから、一般市民でありながらなにかと將軍と関わりのある貴様にな…」

再度静まり返る万事屋。今回切り出したのは銀時だった。

「江戸の人々に被害が及ばねえならなんだっていい。んだが、お前エはそれでいいのか？天皇が主権を握ったところで、国を変えられる保証なんてどこにある？大体そんなもん信じていいのかよ。それに、幕府には宇宙がついてる…どうするつもりだ。」

「なあ銀時、高杉が宇宙海賊春雨と本格的に手を組んだのをしているか？」

た…

齒車は、狂い出し

初動 天皇方の思惑（後書き）

神「ちよっ　なんで新八だけセリフがあるネ！？ワタシ“ 3人”
ってトコしかでてないヨっ」

暗雲 静かな嵐の予感

「晋助様っ!？」

ここは鬼兵隊の船の中。現在地点は京の上空だ。

高杉に呼ばれて集まった幹部が聞かされた唐突な話に来島が声を荒らげたのだ。

「晋助殿、しかし今後他の穏健派の攘夷軍と共に天皇について幕府を倒す等…

我々が手を組んでいる春雨につながる幕府の裏、天導衆などどうするつもりでござるか？

それに天皇など信用できぬ。我々を納得させる説明を頼むでいゝる」

話の割りには不信感を抱いていないように見える部下達に満足しつつ、鬼兵隊総督は嗤った

「ああ、追追　な。今から江戸に飛ぶぜ…ツラ達や…銀時に話つける。

俺たちの手で、幕府…天導衆を葬ってやるよ。」

――――――所変わって、あの嵐の幕開けから数日後の万事屋――

何事もなかったように依頼をこなしていた万事屋だったが、今日は猫の引渡しや浮気調査の結果を伝えるだとか、短時間で終わるものが多かったために万事屋で軽く寛いでいた。

あの日以降は晴天が続いていて、気持ちのいい秋晴れが続いていたのだが銀時はどこかの空で、なんともいえない嫌な雰囲気を感じている。

もちろん新八や神楽も気づいていたが、深刻とも言い難い様子だったのでそのままにしていたのだ。

午後3時を回ったあたりで銀時はいきなり立ち上がり、2人に留守を任せ出歩いてくると言い出した。

「いいですけど。いきなりどうしたんですか？ 銀さん、最近ちょっとすっかりしているから、その心配で…」

「そうアル。何言っても返事同じヨ。それに、一昨日はお茶碗割っていたし、夜も魘されているヨ！？ そんなで1人で出掛けて大丈夫アルカッ？」

「銀さん、桂さんや高杉さんの事が気になるなら、事件に関わるような事があっても構いません。もっと僕たちを巻き込んでくださいね…?」

「ああ。ちよつと遅くなるかもしれないねえが、ちゃんと此処に帰ってくる。留守番頼むな。」

「この不良息子が心配かけてツ！銀ちゃん、危ないこと1人でしちゃダメアルよっ！」

酢昆布を齧りながら手すりに腰掛けて彼の背中を見送る姿はいつも通り。

平穩を保つ

——江戸は未だ

邂逅 必然の出会い（前書き）

銀時 side で… 説明口調は説明口調で面倒なんです、銀さん
って基本何考えてるかわかりません…（T | T）

邂逅 必然の出会い

銀時は万事屋を出て、かぶき町周辺を歩いていた。

って、神楽達にはああいったけど、別に何かを掴んでるって訳じゃないしなあ…

とりあえず遅くなっても心配かけねえようにはしたが…なんか嫌な予感がすんだよなあ

ふわふわな癖っ毛の跳ねる白い頭をガシガシと掻きつつ歩を進めていく

電気屋の隣を通ると、お天気キャスターが「雲一つない青空。爽やかな秋晴れが続くで…」なんていつているので思わず空を見上げれば、

そこに広がるのは、雲ではなく船の飛び交う青空…

「絶好の航海日和ですねえ。ってか？」

空を行き交う船を見ていたらふいに高杉の事を思い出し、立ち止まって宙を睨んでいると 後ろに人の立ち止まった気配。

なんとなしに気だるげな表情を浮かべて振り返れば、できれば会いたくなかった江戸の黒い影、真選組の隊服。

「奇遇ですねィ 旦那ア。またこんな江戸の外れに何の用でィ？」

不思議そうな瞳で尋ねてくるのは、一番隊隊長 沖田総悟クン。どうやら考え事をしていたために遠出をしすぎていたようだ。あまり安全とはいえない此処では迂闊な行為だったかと心の中で舌打ちしつつ、

「いや、特に用はねえよ、ぶらついてただけだ。んでお前は？ 見回到りにしちやあ珍しいところ廻ってるんじゃないの？」

適当な返事で聞き返すと、沖田は暫く黙っていたがいきなりニヤリ、と笑って

「旦那、これは機密事項なんです、どうやら高杉の野郎が江戸に向かっているらしいんでさア。暫くの間地球から離れて：宇宙にも手え出してるみたいなんで、俺らは絶賛警戒中。鬼副長さんのオーラにゃあ隊のものが手を焼いていて：迷惑なモンでさア。旦那も気を付けてくたせエ、そんじゃあこれで失礼しやす。」

とんでもない事をサラっと言うと、用は済んだとばかりに踵を返しどこか歩いていこうとする。

「ふーん。そんなに大変なんだー。でも、その口に銜えているのはなにかな？どーみても団子の串っじゃね？って無視かよ！」

まったく、どこぞの副長さんも大変だねえ…」

沖田と別れてから暫くして、日は落ち、夕日に照らされる川に架けられた橋に行き着いてしまった。あとはどこかで夕飯を済まして帰るかなあ　なんて思いながら佇んでいると、懐かしい思い出がよみがえるようで暫くそのままだった。

まだ幼かった頃。村塾での甘い砂糖菓子のような日々…消える時も砂糖菓子のように儚く、なんて脆い幸せだったのだろうと気がおかしくなりそうだった。でも、あの時そばにはヅラや高杉もいて…

なぜだか今日は高杉の事ばかり思い出させる。以前袂を別ち、次にあったときは斬ると誓ってみせた。

…そんなことが本当に出来るのか？高杉は本当に変わってしまったのだろうか？

「普段使わない頭でいろいろ考えるもんじゃねーなあ」

すっかり暗くなってしまった帰路を眺めながら呟き、歩を進めようとした瞬間…

背後に：しかも殺気を纏った影を感じ、反射的に木刀を当てれば、刀の感触。

今 最も出会いたくなかった宿敵

「高杉イっ!？」

背後から刀をけしかけた殺気の主は嗤い、応えた。

「よお 白髪のお侍さんとやら：。ちいと 手合わせ願ってもいいかい？」

邂逅 必然の出会い（後書き）

この話は流れから決めていったので、タイトル…実は決まってい
ないのです。落ち着くまでコロコロ変わるかもしれません…>〔
〕<

休戦 繋がれるケモノの手（前書き）

高杉さんは扱いずら過ぎなのでもういいです。キャラ崩壊って程でもないといいんですけど…（笑）

休戦 繋がれるケモノの手

夏が終わり、秋になる。そんな季節の変わり目とある穏やかな宵。

日が完全に暮れたばかりで、子供たちの騒ぐ声や食器を片付ける水の音なんかが響く、極普通の日。

だが、江戸の外れにある橋の上では、そこだけ切り取られ、別の世界が広がっているように殺伐としていた。

或る二匹の獣が争っているのだ。

獣…二匹は相反していた。片方は白く、片方は黒く。

片方は今にも折れそうな木の刀を、片方は強靱な鉄の刃を振りかざす。

また片方は護ることで世界をあらわし、片方は世界を壊して世界をつくっていた。

そう、二匹の獣は反対の存在。だからこそ、片方は防戦一方で、もう片方は攻め続けるのだ。

黒い方が橋の端まで走って大きく跳躍する。

相も変わらず激しく打ち合いながら二人は交錯した。

「銀時イ、今日はテメエと争う為に江戸に来たんじゃねエ。」

「ああ！？　じゃあなんでいきなりけしかけて来んだよ？
だいたいなんでいつも俺が木刀でおめえは真剣な訳？俺アなあ、今日は家に帰ってゆっくり休むつもりなんだよ。ガキ共も待ってるしおめえに付き合う気はねエっ」

「てめエこそ何言ってるやがんだア：さっきから言ってるだろうが、その撃ち込みを止めろっつってんだよ！」

高杉は降ってきた木刀を思いっきり返す。二匹は離れた。

激しい攻防の割りには静かな息をする両者・

先ほどまでずっと片方を攻め続けていたのは白の鬼。いつもは愉快そうに相手を屠る黒の獣は、今日はただ白い方のしつこい木刀をいなしただけなのだ。

なにやら争っているのだが、人間離れた闘いをしているように見えて、黒い方は白い方を止めようとしているだけである。

…再び剣が交差しようとした時、いきなり銀時が足を蹴り出し、そ

のままの勢いで高杉の顔に強打した…

「ッ…なにしゃがんだ、銀時ィ…」

散々の説得も聞かない上に顔面をキックしてくる幼馴染…今は敵ともいえる存在だが…なんて普通はいない。怒りも露わに見上げると、

銀時がこちらに手をさしのべているのだ。口には軽く笑みさえ浮かべている。

「？」

「高杉ィ、この前の宣言はこれでナシだ。刀ァしまえ。んでもってその江戸に来た訳とやらを聞かせろや。」

高杉は地面に倒れたままくつくつと嗤い、さしのべられた手を掴んで立ち上がる。

「相変わらずのお人好しだなア　銀時よお。こっからは休戦だ。取り敢えずは、お前エの巢。あのふざけた商売やってる…」

「万事屋にきたいってか？大物攘夷浪士の　高杉晋助さん？」

…まア、食費やらなんやら金出してくれるなら、ようこそ鉄の街、かぶき町へ。」

とある晩の事、獣は久しぶりに手を組んだ。

休戦 繋がれるケモノの手（後書き）

沢山の閲覧やお気に入り登録など、ありがとうございます。しがない文章ですが、どうぞ暫くお付き合い下さい。

平穩 黒い波紋（前書き）

本当にゆっくり進んでいきます。気長にお願いします。

平穩 黒い波紋

とある江戸の外れで二匹…いや今は二人の共犯者が手をくんでから数時間後…

夜は更け、満月が夜空の真ん中に君臨しようとする頃のことだ。

かぶき町の中心とも言える人物、お登勢のスナックの2階で日々ギリギリの生活を送っている万事屋では…

まだ成人を迎えていない若い男女がなにやら言い争っていた。

しかし、こころは江戸の外れとは違い、力の差が歴然である…

「ちょっと、神楽ちゃん。もう12時だよっ！寝不足は美容の大敵
っていつも言ってるでしょ？銀さんは多分どこかで飲んでるから遅
くなってるんだよっ。」

「五月蠅いアル眼鏡。今日の銀ちゃんは絶対酒なんか飲まないネ。
これ女の確信ヨ
銀ちゃんは帰ってくるネ、必ず。でも、そうじゃない。もっと別
の匂いがするヨ…」

神楽はソファーに座り、友達から貸してもらったのだという雑誌を
パラパラと捲っていた。

「神楽ちゃん…」

新八は神楽の向かい側に座ると、顔を上げようとしないうちの、大事な家族である女の子を見つめる。

暫く俯いていたが、やがてかすかな微笑を浮かべると顔を上げた。つられて神楽が顔を上げると、目を合わせて言う：

「神楽ちゃんがそんなに言うなら信じるよ。何かあったら大変だし、僕も万事屋に泊まることにするよ」

「駄眼鏡が一人増えたところで足でまといが増えるだけアル 調子のことじゃねーヨ」

新八に夜兎族の…力を加減した蹴りがめり込み、そのままの勢いで新八は万事屋内を転がる。

と、その時…

二人が来てからもう数え切れない程、何度も壊れている万事屋の玄関外から待ちかねていた声が届く。

「おい、銀さんが帰ってきたぞー アレっ？ まだ新八の奴帰ってねエのか…？」

靴を見ながら銀時が首を傾げていると、いつもとは違い二人が玄関まできて迎えてくれた。

「お帰りヨ 銀ちゃん。まったくこんな遅くまで出歩いてっ」

神楽は軽く口をすぼめ、お母さんのような口調でむかえ、

「本当ですよ。心配したんですからね、銀さん。」

新八は言葉少なに笑った。このまま3人で万事屋に入っていくのかと思われたが、

「誰アルカっ？」

神楽がいきなり叫んだかと思うと、たった今銀時が帰ってきた玄関前の方に蹴りをいれつついつ取り出したのか夜兔特有の傘から弾丸を放つ：

「神楽ちゃんっ それはダメっ そいつと今殺り合うのは絶対
ナシっ！」

先ほどまで機嫌の良かった銀時が 慌てた様子で神楽を掴み、引き
戻す。

「おいおい銀時ィ、ずいぶんな出迎えだなァ……？」

怒りを隠すことなく煙と瓦礫の奥から現れた人物に銀時以外の人物
が目を見開く

幕府の転覆を狙い、中から外から揺さぶっては破壊を繰り返す目下
の最重要テロリストの指名手配犯…

攘夷戦争を闘い、今では攘夷志士として名を馳せる 鬼兵隊総督。

「高杉っ!?!」

平穩 黒い波紋（後書き）

お気に入り登録や評価、本当にありがとうございます。

文章も直していきたいので、たくさん指摘して下さいませゝm
┐ m< ┐

静寂 子供は眠る（前書き）

お読み頂き有難うございます。更新じゃなくて展開が亀：展開優先で早く回した方がいいかわからないので、貴重なご意見、お待ちしております。

静寂 子供は眠る

深夜・泣く子も眠る 丑三つ時：

そんな時間にも関わらずなかなか眠れず、布団の中で一人唸る人物がいた

江戸のかぶき町に佇むなんでも屋 万事屋銀ちゃんの和室である：

《ああああ…眠れない。眠れないよオオオ！！》

トレードマークにして自身の大部分である愛用の眼鏡を外し、眠れ

ない夜を明かすのは、万事屋の従業員…志村新八

《ってかそりゃそうだよね！！テロリストと一つ屋根の下で寝るなんてできるわけないだろーがアアア！！》

一人ツツコミが胸中で空しく響く――しかし彼を助けるものは今いないのだ。

こっそりと布団から顔を出し、辺りを伺う 隣に寝ているのは同じく従業員の神楽ちゃん
和室には自分と二人しかいないが、彼女は当然のように酷い寝相で熟睡している…

さらに 和室と居間を区切る普段はなんでもない…しかし今の新八にとっては掛け替えのない 薄い襖を見つめる… この奥には、銀さんとあの大物テロリストで神楽ちゃんが直接対峙した事のある

高杉晋助がいる。しかも気配からして寝ている。

《 ってか、 イヤなんでそんな人が万事屋でフツ―に寝てんのオオオ?? 》

謎としかいいようがない。あの嫌な台風の日からずっと 銀さんの調子がおかしく、二人でそれとなくは心配していた。

今朝はその事を伝え、無茶をしないようにと念を押したのだ。なのに…

《なんで高杉さんっ?桂さんならまあ普通って感じだけど いくら

幼馴染み（？）だからってコレは・・・でもやっぱりあの桂さんが言
った事、なにか起ころうとしているってことだ。もちろん江戸で
も騒ぎが起きるだろうし…。全国の攘夷浪士が…一斉に…？ もし
かしたら、銀さんは…》

こうして新八はいつもより大分遅く、深い眠りに落ちた…

い…

万事屋の夜はまだ長

静寂 子供は眠る（後書き）

今日中にもういっこ出します。次話はちよつとだけ面倒なお話になってしまいますが、宜しくお願いします。

暗黙 難破船の行方（前書き）

ごちゃごちゃ会話文が長いです。すみません m () m 文章力
不足です。

暗黙 難破船の行方

「ようやく眠ったみてエだなア……　　ったく、手間ア掛けさせやがって、」

「イヤイヤ、新八が眠れなかったのって明らかにオメーのせいだろーが!!」

新八が眠りに就くや否や真っ暗な万事屋の居間で騒ぎだしたのは……銀時と高杉。

子供二人が眠りに就くまで律儀に息を潜めていたのだ。

高杉は飾ってある“糖分”と書かれた額の下にある窓の縁に腰掛け、煙管を弄ぶ。

銀時も煙たりながらソファーに寝転ぶ。

「フン。やっと本題に入れるなア：ここまで別の道を通ってきたのは大避けだろーが、もし俺が、テメー巻き込む為にわざと餌付けしてきたらどーするつもりだったんだ？」

「いやね おたく、なんか微妙に脅してくれてるみたいですけど、オメーが江戸まで来てることはとくに真選組も知ってるからね。その派手な着物のせいで目立ってんのわかってるよね？」

だるそうに返事を返し、帰りにコンビニで買ってきたいちご牛乳を吸う銀時を横目で見つつ、高杉が離し出す。

「近頃、この国がやたらと騒がしいのは知ってるよなあ？」

「まあな。こっちにはヅラがいるもんで、情報には事欠かねエよ。ただ、詳しくは知らねえ。つか、オメーは、その」

「あア、鬼兵隊が目指すのは世界の破壊…幕府にも攘夷派が潜伏している。春雨も幕府を生かすことに執着なんかはしてねエ。んだが、政権…日本の中心が天皇とやらに変わったところでもかわんねエだろ。天人共は地球の窓口として、この国を牛耳り屠る…幕府の裏にも妙な奴等がいるしなア。俺もいろいろ手エだしてみたが、あの犬…裏の幕府にとっちゃ邪魔でしかねエよ。オメーはご執心みてえだが…幕府はあいづらを盾程度にしかみてねエさ。なあ、どうするつもりだ？」

「んなことわかってるし、話が長すぎだろっ！や、わかってるし、

銀さんもちゃんと考えてたからね！幕府を倒すっていうのは存外簡単なんじゃねえの？だって將軍が天皇に政權でもかえしや、幕府なんてないに等しいだろ？旧き日本の勢力と新しい宇宙からの征服：俺はあの時みたい仲間を喪うの事なら命に替えても止めてみせる。死ぬつもりはないけどな。幕府は説得で崩す。そんであの空飛ぶ裏幕府は海の上で墮とす：天人がきたときもずっと地下に潜ってやりすごしていたような天皇にこの国をあずけるなんてマネはしねえよ。飾りとして、利用できるだけしてやるさ。…なんて、机上の空論：わかんねえな。なんで今更動き出したんだ？」

高杉は銀時をみるともなく見ていたが、ふいに江戸の中心の方を見つめながら応える

「最近、ヅラが昔狙ってたターミナルがなあ、そろそろ小さすぎるんだそうだ。だから江戸中ぶっ飛ばして大ターミナルにしようって事らしい。これは天人側にしかない情報だぜエ。それで慌ただしい時に天皇だア：一遍に片アつけれるまたとない機会だ。」

獲物を見定めた獣に目をして嗤う高杉を照らすのは、不吉な紅い満月：

暗黙 難破船の行方（後書き）

読みにくい点多々あるかと思いますが、読んでいただき感謝です。

幕間 女王の実力（前書き）

お気に入り登録等、たくさんありがとうございます。3連休なのでちゃんと話を進めたいです（笑）

幕間 女王の實力

「おはようございます！皆さん、早く起きて下さいっ」

午前8時。万事屋に響いた声の主は、従業員兼雑務の新八だ。

昨夜に踏ん切りがついたのか いつも通りに神楽ちゃんを起こし、

寝ていた和室から銀時と高杉がいるであろう事務所兼居間に入ったところで、妙な声を発した。

「は？」

ソファ―にいたのは昨夜突然の訪問者 高杉晋助。

そして、その横のテーブルに載せられた紙切れ…

「今日は結野アナの…じゃなくて、とあるお方から大切な物を受け取りにいくので出かけます。お昼には帰ってくるから、それまで高杉と仲良くやってろよー 銀さんより」

「ハアアアっ!？」

なにやら叫びながら新八が和室に駆け込み、盛大な音を立てて襖を閉めてから蹲る。

（無理！！腹決めたなんて嘘！まだ死にたくないよオオオ）

取り敢えず逃げようと辺りを見回すと、なぜか寝ている筈の神樂がない。

「かつ神樂ちゃん！？」

恐る恐る襖を開けると、そこでは有り得ない光景が繰り広げられて…

「なにしとんじゃアアアっ!???」

先ほどまでびくついていたのが嘘かのような大音量のツツコミが炸裂した途端、

新八の口は神楽の手で塞がれる

「なにするネ 新ハイ!! ワタシこいつらに酷い目にあわされたヨ だから今はコレ、仕返しアル!!」

「へえ、そうなんだ、仕方ないね。 じゃねエエだろーが!!」

神楽がムッフ と笑いながら熱心に手を動かしているのだが、なにをしているかというと、寝ている高杉の顔に落書きをしているのである。

そんなことがバレたら、というかバレるに決まっている。

「絶対殺されるウウ！逃げようっ 逃げようよ神楽ちゃん！」

「オウっ」

窓枠に足を掛けた状態でどちらがさきに出るか争っていると、その瞬間開いた襖から：最も聞きたく：ない：声が：

「なしてやがる、ガキ共。」

「わああッ」その声に新八が固まり、神楽と共に和室に落下する。

気絶した新八の横で、神楽は慌てる。

が、高杉の顔には適当に描いた落書きが載っているのだ、笑いを押し殺しながら、弁明をする

「ちょっと違うヨ！：プッ ソレ、銀ちゃんがやったのヨきつと！
：クスッ だから今すぐ顔洗って朝ごはん作るヨロシ！ ブハハハ
ハっ！」

高杉は訝しむようなふざけた顔で笑いを殺しきれていない神楽の話を聞いていたが、

神楽が堪えきれず笑いだすと、とりあえず洗面所へ駆け込んだ。

数分後…

高杉が居間に戻ってくるなり発した人物の名は、

「銀時の野郎、覚えてやがれ…」

和室の襖からこっそりと覗いていた新八と神楽はため息をつく。

「良かった。高杉さん勘違いしてくれたみたいだね。 アレっ！
？神楽ちゃん？」

「オイ、片目エ。さっさとご飯つくるヨロシ。かぶき町に来たから
にはこの女王神楽様に従うがいいネ。」

銀時の置き手紙を見て怒りが強まったのか、手が若干震えている高杉に居間にいつの間にか移動していた神楽が命令していた。

新八が一人焦る中、置き手紙を懷にしまった高杉が呆れたような顔

をして神楽をみる

「女王様ねエ…ったく 銀時の野郎、何から何まで…」

ぶつぶつと呟きながら台所へ向かっていった。

高杉と新八神楽が織り成すドタバタコメディー
が今始まるっ！

幕間 女王の實力（後書き）

…始まりません

次話はちよつとそんな感じですが…この前にゆるつとした短編を出したんですが、アレと此の話は繋がっています。

留守 獣と兎と眼鏡と…（前書き）

ジャンプ本誌では万事屋金ちゃんが連載されていますが、こっちじゃ万事屋晋ちゃんです（笑）

…明日も出しちゃったら暫く潜るかもです…

留守 獣と兎と眼鏡と…

はふはふ　ズー

時刻は午前9時

先程までドタバタと騒がしかった万事屋も今は出掛けに銀時が用意したのであろう味噌汁と
神楽特製の卵掛けご飯を食べる音だけが響いていた――

本日5杯目の卵掛けご飯を掻き込み一息ついて、味噌汁をお椀に注ぎながら神楽が口を開く

「んで？片目はワタシが支配する万事屋になんの用アルカ？かぶき町征服アルカ？」

「片目じゃねエ…高杉だ。用があんなア此処じゃなくて銀時の野郎さ。今回は江戸を壊すんじゃないやねエ…護りに来たんだよ。」

予想外の返答に神楽が咄然としていると横から新八が口を出す

「どういう風の吹きまわしですか高杉さん？結局みんなして何をするつもりなんですか？」

警戒心を解いた新八は本当に困ったような顔をしながら続ける

「桂さんや高杉さん それに銀さんもみんなで様子がおかしくて、何か大変な事が起こる…起こっているんでしょうけど」

今日も江戸は平和で、かぶきは快晴なんですよ。さっぱりです…だから、やっぱりもっと詳しく教えて欲しいんです。

僕達だって銀さん達の味方です。江戸を護りたいんです…」

「そうアル 昨日も私達が寝た後にコソコソと…」

途中で丁度食事がかたづき、話はそこで止まった。

3人揃って手を合わせ、新八が食器を片付けると高杉は長椅子で胡座の上に置いた荷物を探りながら話し出す。

「悪イが この件は俺だけじゃ伝える事はできねエ。 銀時は妙に慎重な所があっからなア まあそんなに心配しなくても直にアイツが明かすだろうぜ。今もそのことで動いてるしなア」

「…。遊びに行った訳じゃなかったんですね…。」

寝ている間に 煙管を没収され苛立っているのか三味線を荒く弾きながらも律儀な高杉に新八も神楽も興味を持ったようで

「オイ 高杉ィ：お前の仲間 またことかロリコンはどうしたネ 大将ふらついてていいアルカ？？」

「あア 俺の隊はそんなことじゃあ崩れねエさ 大方、万事屋もそんなもんだろオ？」

：アイツと俺は正反対だが：紙一重ってやつだ。
それにこの劇 鬼兵隊にも役割があるんでねエ．． しっかり働いてくれてるだろオよ：」

そういつてクツクツと嗤う高杉を見つめる2人は顔をあわせる

「：銀さんの幼なじみで一緒に攘夷活動をしていたんだよね：でも今は敵で、今回は休戦中：？なのかな。にしては銀さんの最近の事をよく知っているみたいだね： まあ、細かい事は銀さんが帰

ってからにしよう。」

何故か心無しか晴れやかな顔で家事を始めつ新八を見送った神樂も期を取り直したように高杉の方を向き、持ち物をあさり始める…

しばらく平穏な時が流れ、そして

チャイムが、鳴った―

留守 獣と兎と眼鏡と…（後書き）

車酔いでもつくったんですけど…いまいち上手く動かせないので弛んじやってますね。

お読みいただきありがとうございます！

依頼 旧き伝説の帰還（前書き）

銀ちゃん、誕生日おめでとう！！

ところで、前話は酷かったですね…今回は楽しんで創り過ぎました。
以後自重します。

依頼 旧き伝説の帰還

「たでーまー 銀さんが帰ってきたぞー」

ガラガラッと昨夜も壊れた玄関の引き戸を開けて家主が帰ってきた

そのまま居間に入ってきた銀時に寛いでいた3人がそれぞれ、訝しむような憎むような表情で見返す。

「…おいおい 3人揃ってなんつー顔してんの？ つーか仲良くなつたんだ。…じゃなくて なんか言ってくんない？？なんでずっと無言なんだよ！！」

「ああ すみません銀さん。なんか意外な格好だったんで 朝から何処に行ってたんですか？」

…時刻は午前11時30分

朝から置き手紙と高杉だけを残して万事屋をでていた銀時は今

何故か白の戦装束に鉢巻き　そして真剣を腰に帯びた出で立ちで
いるのだ。

銀時が返答につまり頬をかいていると高杉が横槍を入れる

「ずいぶん久しぶりだなあ・・　白夜叉様ア・・　お使いはできただろ
ーなア?・・しかし、懐かしいねエ」

「まったく自分で用意しといてよく言うぜ。
まあ　もともと真選組にはオメーのせいでバレてるから話つけてあ
るし：簡単だったよ。」

久しぶりの戦装束に少々ぎこちないが、いつも通り長椅子に寝転び
頭の下で手を組む様子はなんとも妙で、子供2人を戸惑わせる

「それって銀さんが戦争中に着ていた服ですよね：　餌って：誰か
をおびき出すつもりなんですか？」

「銀ちゃん本当に真っ白アルナ それに香水？みたいな匂いするヨ……」

神楽の発言に若干取り乱した様子の銀時は冷や汗をかきつつ弁明する

「この服はレプリカねっ！ホラこいつボンボンだから……記憶力で作ったらしいよ！！香水は……イヤ 本当に真面目にお仕事してきただけだから！！正確には……」

ここで一旦言葉を切り、立ち上がって2人の元へゆき、高杉に向かって軽く会釈をする。

「大物攘夷志士・高杉晋助様のご依頼を我等万事屋がお受けいたしました……」

依頼内容は 京の反乱を引き延ばし、東の城を崩した上で……新しき空へ門扉と空飛ぶ黒幕を撃ち落とせと。協力して下さるのは鬼兵隊の皆様と春雨の方々ですね。必ず達成できるよう、全力を尽くさせていただきます」

「春雨が仲間ッ！？バカ兄貴は一体何する気アルカ？」

いち早く反応した神楽に高杉が旧き姿の銀時を見ながら答える

「神威の野郎か？ 銀時、テメー厄介なもんに惚れ込まれたなァ
…お前と戦うための条件がこの依頼達成さ。…お前やんなァ俺だ。
わかってんだろーな？」

白い銀時は服を汚さないようにいちご牛乳をストローで吸いながら呆れた顔をする。

「いや…オメーの獲物でもねーし 神楽の兄貴にやられるつもりも
ねーよ。神楽…オメーの兄貴の事はテメーらで片付けられるな…？」

「ふんっ 当然アル！！バカ兄貴を取り戻してみせるネ！」

控えめな胸を張る神楽の頭を撫で、糖分と書かれた掛け軸に向き直る銀時に2人も続く。

「万事屋 出動だアアア!!」

依頼 旧き伝説の帰還（後書き）

本当はサブタイトルは別にあるんですが、
っていうそれだけです。

裏方 動かざるモノ（前書き）

本当に更新落ちます。

こっちの銀さんはあくまで格好良く（？）いきますので。

キャラ崩壊はご愛嬌ってことで：セリフは修正するかもしれませんが（笑）

裏方 動かざるモノ

彼岸花が川岸を朱く染め上げ、本格的に冬が近づく江戸は 今、
静かな長い秋雨に濡れていた。

そんな大江戸の中心に位置し、周りの景色からどこか逸脱した雰囲気を持つ異星の象徴：所謂ターミナルから程近い廃ビル街に位置する小さな路地裏・

太陽の下を生きる人間ならば避けて近寄らないような薄暗い裏通りにも等しく、冷たい雨が落ちる早朝である。

そんな中、一人の編笠の男が軒下にたむろをする者を掻き分けるようにして走っていた

息は切れ、明らかに体力をもっているであろう身体も悲鳴をあげているだろうに更に雨に濡れ、必死といったような出で立ちである。

男はようやく立ち止まり、目的のビルへと入っていく…

「桂さーんっ!!」

勢いよく開けられた扉から聞こえた野太い大声に若干眉を顰めたのは 男が入ったビルの2階で何やら会議をしていたらしき着物の厳つい男達。

その中心に立ってんまい棒を握り締めていた優男が突然の闖入者のもとへ走り寄り、何やら耳打ちすると 2人で部屋をでていく。

2人が入っていった部屋はどうやら反対側の路地に面しているようで此処からは見えない――

そこで真選組 監察に所属し現在は監視任務につく山崎退は望遠鏡を置き、牛乳のパックを開けつつ呟く

「まったく こんな微妙な任務やらされてミントンの大会に出られないなんて…雨だから試合は中止だろうーがってーだから鬼の副長なんだよ。んなわけねーでしょう。しかも高杉一派の動向よりも桂の張り込みか…アジトがわかってるのに突入しないのは万事屋の旦那の為だろうけどねえ…。つくづく副長も…ジュー」

真選組の副長…土方から、あんぱんではなくクリームパンを山のように渡された監察、山崎は牛乳をストローで啜りつつ再び望遠鏡を手にした

数時間前―

まだ東雲といった時刻。江戸を護る真選組も見回り隊が引き上げて久しく、殆どの者が眠りに落ちた頃…

屯所には静かな侵入者の影があった。といっても堂々と門から入ろうとした所を徹夜明けの土方に見つかり呆気なく捕まってしまった訳だが：

「おいイイイ！！てめえはそんなに捕まりたいのかっ！なら俺が今叩っ斬ってやるわ！折角釈放してやったのを無駄にする気かお前は！！」

屯所に侵入というか進入しようとした銀時は今縄でぐるぐる巻きされて庭にいる。上から怒鳴る土方の声はいつもより控えめだ。

銀時は暗闇の中で薄く笑うと、あっさりと縄を解いて立ち上がり、土方の首に腕を巻きつける：

「んな訳ねーじゃん、多串くんには聞いてもらいたいことがあつてきたんだよ…時間がねえんだ。中に入れてくれないー？」

銀時の真剣な顔つきに何かを感じたらしい土方は 至極しぶしぶといった体で歩きだす。縁側から直接入り、途中で山崎を呼び出し副長室へ銀時を案内する。

両者が床に座り、落ち着いた所で銀時が頭を掻き、面倒くさそうに口を開く

「んじゃまー一丁、交渉開始といくぜ、真選組よお．．」

裏方 動かざるモノ（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

ところで、頂いた感想には大抵 誤字脱字の修正を、とかいてあるので直したつもりですが、もし未だ不備があればなにかコメント頂けると嬉しいです。（作品でも作者ページでも何処でもです）

再臨 巻き込む者。巻き込まれる者。（前書き）

どうでもいいんですが、坂田金時のインナーって白ですか？金ですか？作者がわからん描写をしてしまいました…（苦）

再臨 巻き込む者。巻き込まれる者。

・・・ってな訳で 桂の潜伏場所を流してもらおう代わりに鬼兵隊への妨害を辞めさせられちまったが：

明け方から降っていた雨は止み、江戸上空には重い暗雲が立ち込める…時刻は午前10時過ぎ

男は足音静かに歩きつつづけていた。

旦那も無茶言いますねィ。場所だけバラして昼まで手エ出しちゃいけないーなんて、まア 情報が正確だったってのは山崎から聞いているが：

そこで真選組一番隊隊長 沖田総悟は足を止め、つい先程 奇妙な

格好をした銀時が閉じた万事屋の玄関を軽く見据える

「旦那ア、旦那は… 俺ら真選組を一体何に巻き込むつもりなんですかィ…」

―数時間後

「きゃっほーっ!! お寿司アルー」

「お寿司の出前ですか、銀さん ありがとうございます。 なにか あったんですか？」

万事屋にしては随分と豪勢な昼食に反応する従業員2人に対するオ
ーナーのテンションは高い

「おう、飲んで食いまくれエ!! 今万事屋はかつてない金蔓を手
にしてんだア!! 新八 神楽ア なんでも頼んでいーぞオオオ!!
なア、高杉様ー!?!」

上機嫌にいちご牛乳とお菓子の山に埋もれる銀時はゲラゲラ笑いな
が懷を叩く…

昼前に帰ってきた時の服からは着替え、今は高杉の持参したもう一
つの着物を着用している。

始めて会った人からの印象はあまり変わらないだろう、普段と同じ和洋折衷の着物ではある…が。

色彩が全体に違うのだ。いつもとかわらぬ渦巻きの入った着流しの色は黒。インナーの上下も黒ではない。更に頭には金髪のアトウィッグを着けている…その容姿は 正に

「おめえの写真見せたら着物屋が勝手に作りやがったんだ…坂本の奴はお前の事金時とか呼んでやがったなア …その通りじゃねえか」

高杉が食事を摂りながら何気なく呟くと、金時…基銀時が思い出したように目を見開き、接いでなんとも面倒そうな表情をつくる。

「そーいや 辰馬の野郎が近々地球に来るとか行ってたの忘れてたわ こっちで大きな祭があるとか言ってたよーな気がするが、まあいーや。」

そういつて更にケーキを頼張る銀時は、本当に坂本の事など忘れてしまったかのようだ。

と、その時。今まで見るともなくついていたテレビ番組がいきなり切り替わり、硝煙の立ち込めるいかにもな爆発現場の中継が映し出されていた。

どうやら空から落ちてきた小型船が地面に落ちて爆発したといった様子である。突っ込んだのが只の空き地だったのは奇跡だと近所の住人が騒いでいる。

暫くすると煙の中から黒い影がふらふらとこちらへ近づいて来る…人影なのだろう、駆けつけた消防隊員が走りよっていく…長身だ…

更に頭はもじやもじやと爆発を表している…そしてその手が握るものは…

〇〇袋―

「た・辰馬アアア!？」

なんともタイムリーで空気を読まない登場の人物はテレビの中で喚いている

「わしゃ 銀時じやのーて、金時に会いに来たんじゃ」

金髪に黒の着流しの出で立ちである銀時は、倍増したともいえる厄介事に頭を抱えた・

再臨 巻き込む者。巻き込まれる者。（後書き）

お読みいただき有難うございます。再び戻ってきますので（笑）

疑惑 白煙は掴めない。(前書き)

お久しぶりです。

お気に入り登録など、ありがとうございますっ！

疑惑 白煙は掴めない。

「…こちら一番隊A班っ!! 標的、見失いました!…」

「…こちらB班!!…一端の捕縛に成功! 本部へ向かいます…!」

現在、真選組の情報部…延いては局内全体が大混乱を起こしていた。

数日前に銀時から齎された大物攘夷志士…桂小太郎の潜伏場所の件が長引いているのだ。

当日…突入時刻である午後12時までには真選組の総力を集結させていたといっても過言ではない。

いや、可能な限りの数が完璧な陣を組んでいたはずだったのだ。

しかし…桂の手勢が真選組の予想をはるか上回っていたのだ。

桂を確認したあのビルは単なる入口で、地下深くにある要塞のような場所が真の潜伏場所だったのだろう、後になって調べた結果だ。

予想外の反撃に驚き、隊形を崩したのが不味かった。更に、時を経るにつれ攘夷浪士の活動は激しくなっている。5日間連続で江戸全域を戦場とした隠れた攻防戦が繰り広げられているのである。

今でもあちこちの隊からの連絡が絶え間無く続き、通常業務は全て他の機関があたっている。

とはいえ、江戸の一般人はそのような事には全く気づいていない。所謂平和な秋の一日である。

…真選組は今、裏舞台を演じているのだ。

「チッ」

土方は苛々と煙草を噛み潰していた。真選組の情報を一手に集める部署の隅である。

もちろん彼は副長とはいえ最前線で戦うのが常だが、今回に限っては江戸のあちこちで同時に浪士達からの襲撃があるのだ。

幾重にも別れた隊を統率するために本部で指令を出しているが、埒があかない。

「土方さん、どうやらC班の方も陽動だったみたいでさア…何故か、地方で活動している筈の浪士が多数捕縛されてるみたいですねイ。というか、奴ら増えてるように見えませんかイ？」

「明らかに増えてんだろーが…初日の5倍には膨れ上がってる。つか、てめーは何サボってやがんだ！」

「何言ってやがんですかイ土方コノヤロー。俺ア 負傷した隊員をここまで連れてきたんですぜイ 奴ら、まるで俺達に怪我をさせないよう命じられてるみてーで…そのまま逃げちまいやしてね。全員殆どかすり傷程度なんでさア…ひよつとしたらこりゃ、」

「ああ、俺達真選組がこの一件だけで手一杯になるために騒ぎが起きてるような…嫌な予感がすんだよ。…ごちゃごちゃ言ってねーで、早くいけ」

銜えていた煙草を灰皿に押し付ける。思わず溜息が出そうになり、

顔を上げて灰色の天井を見つめる：

落ち着いてみると、この件の発端は5日前の明朝、あの万事屋を営む男 坂田銀時、いや：元攘夷志士で 白夜叉の異名を持つ彼が真選組に侵入してきた事だったのだ。

彼は俺たちに見つかっても、捕縛されても抵抗は無く、焦りも感じさせなかった。つまり、桂の居場所を伝える為に此処にやってきたようなものだ。

そもそもの目的である鬼兵隊への接触を絶つような行為の真意もわかっていない。

只、今回はテロの為に来たわけではないから邪魔しないでくれ、保険としては自分の首を差し出すとだけ。あの銀時が言い切ったのだ。：ほぼ間違いないと見ている。

現在実際に、真選組は鬼兵隊の動きには関与していない：：というかできない状況にある。

恐らく銀時と桂は繋がっている：更には鬼兵隊の高杉もだ。幕府の元で毎日のように攘夷浪士と接触していながら、真選組の持つ情報は思いの外浅いのかと思うと悔しくない訳がない。

土方は新しく入った無線に応答するため、足を踏み出した。

疑惑 白煙は掴めない。(後書き)

もうハロウィンですが、此方では10月上旬です(笑)

追憶 白のモノからの囁き（前書き）

Trick or treat!! 読んでくれなきゃ○○しちゃうぞっ！

追憶 白のモノからの囁き

時は遡り、真選組の桂襲撃から翌日の万事屋。

「本当に良かったんですか？坂本さん、一泊だけで帰ってもらっちゃって…」

「あー？んじゃ聞くけどよお、万事屋の中に大の大人が2人も増えた状態で何日も過ごすしますよ。…っほら、むさ苦しいだろうーが。だいたい、本来は俺一人で住んでた訳だからね。」

「はいはい。まあ、姉上の社員旅行で泊まらせてもらってる以上何も言えませんか…」

昨日の午後、警察まで回収に言った黒い方のもじやもじやの話である。彼は昨晩は財布を取られながらも結局は万事屋に泊まり、先ほど日が登りきらぬ内にと帰っていったのだ。

「おはよーアル 銀ちゃん、新八イ、やたらと早いアルなー」

押入れの襖が開き、神楽が目を擦りながら、なんとも眠そうに出てくるが、きよろきよろと辺りを見回すと、首を傾げる。

「あれ？タカスギとタツマは？星へ帰ったアルカ？」

「おはよう神楽ちゃん。つーか二人共地球出身だからね。坂本さんはさっき帰っちゃったけど、高杉さんはちよつとした用。すぐに帰ってくるってさ。」

「ふーん。つーかあの片目野郎いつまで万事屋に居座るつもりアルカ…。帰るところ無くなったネ？」

「まーそんなもんだろ。んで、それが帰ってきたから出掛けたの。」

銀時は炊いたご飯をお櫃に移動させて居間に運んできた。反対に神楽は洗面所で顔を洗う。新八は定春のエサを準備した手を洗い、手

を拭きながら疑問符を浮かべる：

「なんか、信じられないですね。桂さんや高杉さん、坂本さんまで万事屋に集まってきたて、江戸の平穏さが不思議すぎませんか」

「まあな、つつーか今回ののはマジだから俺らも関わってる訳だし：江戸が平和に見えるのは上辺だけってことだよ、新八くん」

そう言って味噌汁を注いだ碗を新八に手渡す。新八はそれを受け取ると逆の手で箸を配る。

「そういえば高杉さんって少食ですよ。ご飯の量を増やしたり減らしたりしてないのに：」

「あー：アイツはぼんぼんだからな。少食つつーか、高級なモンちびちび食って酒呑んでんだよ。背エ低いのが証拠だぜ。おめーらも気イつけろや」

「あいヨー おかわり！！」

「はいはい。…神楽ちゃんは取り敢えず安心だね」

ぴーんぽーん

「まったく、んな朝っぱらからごちゃごちゃうるせエエエ！！！」

銀時が瞬時に玄関に飛び蹴りを入れる。しかし、外から聞こえたのは老婆の怒鳴り声ではなく、若い男が潰れる音。

…

「桂さん、お茶です。朝ごはん要りますか？」

「ああ、すまんな。味噌汁だけ頂こう。」

「なに寛いでんの？」

「違うわっ！こんな時に寛いでいる訳なからう。昨日もみんなに
つみてる の使い方を教えてもらったりして大変だったんだぞ、感
謝しろ銀時！」

「はぁ？秘策があるってオメー：まさかtmitter使って攘夷
志士共集めてんの！？確実にバレバレだろうが 警察なめすぎだろ
っ」

「いや、俺のアカウントではなく、エリザベスのアカウントを使っ
ているから安心しろ。」

「安心できるかアアア！」

銀時がキック、次いで神楽が拳を桂の頭に振るう。新八は特に手は
加えないが、明らかに呆れている。

「これはっ痛いぞリーダー！でもなあっそのおかげで今全国から続

々と攘夷志士が集まってきているんだぞ。我らのフォロワーがこの国を覆う日も遠くはないのだっ！」

「もういいです。それで、なんてささやいたんですか？（ツミッタ）でささやこうってよく聞きますし、いつものメール勧誘とは違うんですよね？」

「そうか、新八君やリーダーには言ってなかったが、昨日銀時に手伝ってもらって全国の攘夷志士に号令を出していたんだ。つみったーはその一貫という訳だ。」

「ぎ　銀ちゃんが真っ白な服着てたのはその所為アルカ？…でもなんでそんな事で人がいっぱい集まるネ？」

「銀さん…もしかしてアンタ本当に戦争の英雄だったんじゃないで

すか？」

銀時は無表情に立ち上がり、台所へ向かいつつ目を瞑り、呟く

「んな大層なモンじゃねーよ…」

ドンッ

「イテッ」

気配を感じなかった為によけること無く銀時とぶつかったのは、高杉だった。

追憶 白のモノからの囁き（後書き）

どうでもいいんですが、ハロウィン没話の冒頭ダイジェスト。

「Trick or treat!! お菓子をくれなきゃ…殺しちゃうぞっ」

「なにいつてやがんだ…テメーにやる菓子はねエ。帰れ。」

「もう、相変わらず堅いなーお侍さんは。

せっかく地球に行くんだから面白い事は知っておかなきゃと思っ
ねー、

そしたら…お菓子を食べながら殺し合う祭があるって聞いてね。
つい試したくなっちゃったんだ」

「おい団長、確かそんな祭じゃなかった気がするぜ このすつとこ
どっこいが、」

「フン、阿呆くせエ…」

「まあ何でもいいけどね…取り敢えず闘わないかい、高杉さん？」

ゴメンナサイ。

招待 穢れた操り人形（前書き）

ちよつと繋ぎなので短くてすみません。

招待 穢れた操り人形

混乱していたのは真選組だけでは無かった。

しかし百戦錬磨の英雄であろうと予想できなかっただろう事態が起きていたのもまた事実である。例えそれが真実で無かったとしても。

「副長：江戸全域で確認されています。全隊が目標見失いましたっ
！！」

先ほども断続的に起きていた攘夷浪士との交戦が江戸全域：真選組全隊、全班で途絶えたのだ。

幕開けとなった桂襲撃の昼から丁度5日後の出来事であった。この事態に、元より混乱していた真選組は、取り敢えずといった体で全隊員に撤退命令を出した。

完全に弄ばれたとしかいえない状況に憤る隊士達のもとにふらりと訪れたのは、またもや万事屋のオーナーその人であった。

応対した隊士に開口一番 副長さんに会わせてよ、と最も危険な任務をしれつと言いつけた銀時は、待たされていた客間に土方が入ってくるなり笑った。

「てめーはふざけてんのかっ！！こっちがどんだけ忙しいと思っ
てやる、そもそも今回の件はオメーのせいだ……っ！」

この5日間、殆ど寝ていない土方は後始末に追われる身でもあり、非常に機嫌が悪かった。そんな自分を呼び出したのが銀時で、彼が笑っているとあればスイッチが入るのも頷ける。

とは言え、銀時については不審な点を感じていた事もあるので先ずは話を聞くことにした。

「5日前、俺は此処真選組に来んだ。元攘夷志士、白夜叉としてな」

「はっ？」

「おめーらが桂を襲撃してからの事を元々わかってて、あえて奴の居場所を伝えたっつーことだよ。」

「んな訳…」

「なあ、今幕府の実権が完全に將軍の元を離れてるのは知ってるよな？今の幕府を動かしてんのは天導衆っつー天人のお偉いさんだ。奴等は俺ら地球人の事なんざなんとも思っちゃいねー。

その玩具になってる幕府は宇宙最大の海賊集団…春雨と繋がってる。」

「万事屋ア…てめー何言ってやがんだ。…なんでテメーがんな事知ってやがる。善良な一般市民、なんだろうーが」

「春雨と幕府の密約の為に暗躍した鬼兵隊…高杉と親交を保ってる元攘夷志士だ。もと、なモト！この五日間テメーが碌に眠れなかったのは俺の後輩達さ…近々戦争が起きる。幕府を倒すんじゃない。俺たち地球人を道端に転がる石程にも思っちゃいねー奴等を葬るんだ。」

……………

「やっぱり地球はいいね。お侍さんがいっぱいいるよ…やっぱり今すぐ闘いたいな。」

「何言ってやがる。神威よ、おめーが此処に来たのは手応えのない奴等殺す為なんかじゃねーだろう。折角の邪魔な瘤を取り去る機会だといった事、忘れたのかイ。」

「まー別にいいけどね。シンスケは地球をどうするつもりなんだい？」

「んな事お前にとっちゃどーでもいい事だろう…俺はただ、この腐った世界が許せねえだけだ。」

紫煙が闇に舞う。月に照らされて、夜の兎と黒き獣の影が長く伸びた…。

証明 違った道の交わる先（前書き）

更新遅れてすみません！

証明 違った道の交わる先

…ということだ、貴様ら。真選組は確かに幕府にその尾を振る卑しい奴らではあるが、我等と共通する武士道を持つものである事を忘れてはならんぞ。」

壇上に立つ桂の言葉に、集まった攘夷志士は厳しい表情を崩さない。

銀時が真選組に行き、高杉が吉原に出掛けた後、新八と神楽を万事屋まで迎えに来たのは

…攘夷党筆頭の桂 小太郎とそのペット、エリザベスであった。

彼らが二人を連れていった先は何故か全国より集まった真の革命の志を持つ志士達の会合で、つまり今 桂の演説が行われているということなのだ。

「なに？なんで僕等がこんなところにいんの？めっちゃ見てるよ…あの強そうな人こっちガン見してるよっ!!！」

「煩いアル新八。なにビビってるアルカ：奴ら皆銀ちゃんの手下ヨ。酢昆布買ってくるヨロシ」

「ちよっ！！何言ってるんの神楽ちゃん　すいません、ちよっとした冗談で…」

「何をしている、早くリーダーに酢昆布を買ってこないか！」

「えっ？あっはい：すいません。」

「かつ　桂さん！！：って何言ってるんですか暇なんですか。」

先程の志士は桂に促されて本当に酢昆布をパシらされてしまったのだ。

「まあ　いいですよ。それより、なんで僕らをこんな所に連れてきたんですか？」

「銀時に新八君とリーダーを宜しく頼むと言われてしまったのでな、俺の演説を聞いて貰ったんだ。どうだ、攘夷志士になりたくなっただろう！」

桂は熱く語るが、斜め後ろについて歩く新八と神楽は冷めている。

「いやアル。それより、ヅラもタカスギも攘夷…なのに何故銀ちゃんとは違うアルカ？今は仲間アル…なぜヨ？」

会合が開かれていた会場から離れた一同は移動しながら話していたのだが、神楽の言葉に桂が立ち止まる。

「坂本を除いた高杉に俺、銀時は同じ師の下で人としての全てを学んだのだ。その後、俺達は共に剣をとった…共に戦争に参加したが、その志は全く噛み合っていないかった。」

桂が隣の壁にあった扉を開けて全員が中に入ると扉が閉まり、先程よりも多少大きくなった新八の声が響く。

「それが、紅桜の一件の時の亀裂を生んだんですか？」

「そういう事なのだろうな。だが、俺達が攘夷を選んだ発端は同じだった…俺達の師匠が亡くなった事だ。」

桂は二人に椅子に座るよう促すが、自身は立ったまま横を向いている。

「それって…有名な思想家が幕府によって何人も粛清された…」

新八が躊躇いがちに口に出せば、桂は静かな顔をして振り向く。

「ああ…。高杉はな、先生を奪ったこの世界を憎んだのだ。俺はこの腐りきった国を変えようと、銀時はわからんが、仲間を護る盾となる為に戦っていたようなものだ。」

「所謂攘夷戦争が終わったのは幕府が廃刀令を出してからなんでしょうけど、その頃から幕府も敵へと変わっていったんですね。そう言えば、真選組は攘夷志士の台頭を抑える為に幕府が集めた部隊ですよ…近藤さん達に声を掛けたのは警察庁長官の松平さんらしいですし、完全に幕府を信賴している訳じゃないみたいですから…」

「真選組も俺たちも、それぞれが正しいと思った道を走り続けて来ただけなのだろう、恐らくな。銀時は真選組と鬼兵隊が争った際に真選組を護ろうと闘ったのだろう。…それも一つの答えさ。」

「なんかよくわかんないヨ…。でも、好きじゃないけど、ヅラやエリーも真選組のバカ共も居なくなったら嫌アル。銀ちゃんもきつと何時までもって思ってるネ。」

「リーダーが言うならそうなんだろうな。俺も真選組の追跡を躲したり、銀時やリーダーに新八君、沢山の仲間と馬鹿騒ぎするような日々も悪くない。そう思っている。」

「だからこそ、そんな日常を壊すような無粋な輩を許せる筈がなかろう…」

二人に背を向けて立つ桂の拳は強く強く握られ、震えていた。

そんな桂の肩に二人の手が乗る：振り向けばそこに二人の姿は無く、部屋の扉の前を向いて立っている。

「さあ、行きますよ桂さん。僕たちの敵は天人でも將軍でも天皇でもありません。その幕府を裏で牛耳っていたり、地球を単なる金稼ぎの星だと思っているような輩です。」

「みんなを護る為なら私達も協力してやるアル。天人みんながみんな悪い奴じゃないってコト、教えてやるヨ。」

三人の意思を汲むように、扉が開いた。

証明 違った道の交わる先（後書き）

天道 呑氣か好機か？（前書き）

坂本さん、お誕生日おめでとうございますっ！

天道 呑氣か好機か？

「天皇が今回の件で幕府に牙を剥いたのには裏がおるからじゃ。まー今頃は何故志士共が集まらんのか不思議がっちゅうろう。」

そこで わしらの出番じゃ…国を揺るがすビッグなビジネスやき、
気張って行くぜよ！」

早朝に江戸を出た快援隊が降り立ったのは京にある御所。呑氣に笑う坂本だが、隣に歩く陸奥の声は呆れが目立つ。

「何を言っちゅーか頭…何がビジネスじゃ。わしらには何の利益もないろう、あるのはリスクだけぜよ。」

「んなことわかつちゅー、けんど生まれ育った地球とそこに住む地球人。無粋な天人に安々と壊されるなんて夢見が悪かろう…銀時やヅラの頼みじゃ、すまんが陸奥 手伝ってくれんかの？」

サングラスの奥、坂本の瞳が光を帯びる。陸奥はそれを見ると、歩くスピードを速める。

「頭の給料から差し引いてやる。さっさと行くぜよ。」

再び坂本が声を上げて笑う。見上げた空に輝くのは万人を照らす不屈の光。

所変わるが、江戸も京と同じく明るい太陽がさしていた。

太陽の照らす街角では車椅子の女性と、傍らに立ち煙管を吹かせる女とが静かに佇んでいた。

「月詠、気をつけてね。銀さんも言っていたけど、あの人は本当に危険だと思うのよ」

「わかつている。心配するな…わっちは吉原に害なす者でなければ何みせん。」

今では太陽の照らす吉原だが、その実権は宇宙でも比類の無い大海賊が握っている。

数日前に戦装束で訪れた銀時…以前吉原に太陽を昇らせたその人は、この国を巻き込む大きな波を知らせ、その飛沫が吉原にも降り懸かる事を告げていった。

「此処吉原は、今でも表の世界に出られないような輩が集まる所…銀時が何をしていてもわっちらには関係ない。」

「じゃあ月詠、今から例のお客様の所にいつてくれる？死神太夫って指名されちゃったの。」

「は？」

「ほら、怪しいけれど上客でしょ？断れなかったのよ」

日輪は笑顔で手を合わせ、月詠を伺う。月詠も暫く抵抗していたがやがて根負けする。

「わかった。これは百華としての奴らへの潜入捜査でありんす。着替えてそのまま行く。」

ため息をつきつつも颯爽と踵を返した月詠の背中を和かに見送っていた日輪も、慌てて後ろから声を掛ける。

「いいかい月詠、無理しちゃだめよ。ここは私達の街なんだからね！」

「勿論だ。だから、帰りが遅くなっても心配するな…わっちが護るのは吉原と仲間だけでありんす。」

気高き月と太陽が別れたのは…未だ闇に囚われる女の檻、吉原であった。

天道 呑氣か好機か？（後書き）

お読みいただきありがとうございます！御座います！

土佐弁も郭詞も全然ですみません…ストーリー自体も滞った流れになっちゃっている事お詫びします。

前虎 腐れ縁（前書き）

長すぎるので前後で一場面です。会話だらけで汚いかもしれません
：

前虎 腐れ縁

「え？なにやってんの、おめーら。」

「コイツ、本物じゃねーか…」

部屋に入ってきた銀時と土方が呆然と見つめる先には、やけに落ち着いた体で酒を呑む高杉と…何故か斬って躲してじゃんけんぽんをクナイと手刀で楽しむ月詠と神威の姿であった。

「おめー なかなかやるじゃーか。ツツキーって呼ばせてやるよ。顔もカワイーし、女装して遊女にならねーか？」

「いや、遠慮しとくよ。というより様子が違うようだけど、一度会ったことがあるよね…ツツキーさん。そろそろ外で派手にやらないかい？」

「神威、その辺にしろや。まったく遊女相手に夢中になりやがって…銀時が来たのにも気づいてねーみてェだな。」

てめーが真選組の野郎か？まア突っ立ってねーで 座れや」

高杉に勧められて向かいに用意された座に着く二人であったが、いきなり食事を始める銀時とは違い 土方はそんな銀時の肩を揺さ振り叫ぶ。

「…おいっ てめー！なんで昼間っから泥酔して遊んでる奴らと高杉が俺達を待ってんだ！！俺アまだ詳しい話聞いてねーんだぞ！」

銀時が耳を塞ぐので土方が手を放すと、銀時が肩を摩りながら高杉に目配せする。二人は立ち上がると奥で遊んでいる二人に近づいていく。

立ち止まって向き合った瞬間…お互いに刀を抜くと、折れない程度に叩き合わせる。

「なっ…」

鳴り響く衝突音に土方が目を見開くが、高杉と銀時が刀を納めれば遊女も男も我に返ったようで皆が席に着いて落ち着く。

「これはこれは、久しぶりだね、お兄さん。少しは強くなったのかな？」

神威が開口一番に笑いかけると、銀時が引き攣る。

「俺ア一応、平和主義者なもんでね。強くなりたとかそーゆー感じのはもう卒業した訳だからね。」

んなことより、春雨が寝返る可能性はねェんだろーな？これ以上の面倒事は御免だぜ。」

「…勿論だよ。春雨の実動権は今俺が持つてる訳だから、元老も滅多な事じゃ何も言ってこないしね。お侍さんと戦う為ならなんでもしちゃうよ」

二人が話しているの横で土方は高杉を睨みつけ、高杉は嗤いながら

酒を煽る。そこで月詠も酒を注ぐ手を止め、銀時を見遣る。

「銀時、まさかこの神威とかいう男が吉原の実権を持つ天人集團の長じゃと言うのか？」

「いや：確か結構偉い 提督さん？らしーけど。よくわかんねー、それより吉原ってのは何かと都合がいいからな。おめーらには悪いが昔の仲間殺った敵とは言え、今度限りは休戦って事で…」

神威は月詠に向かってヒラヒラと手を振る。月詠も黙っていたが、やがて息を吐く。

「ふん：手をだすつもりなどありません。だが、吉原を戦場に変える事は許さん。それを防ぐ為なら百華を動かすぞ。」

微妙な笑みを浮かべる銀時に冷たく言い、横を向いて煙管を吹かす月詠の横で：猪口を置いた高杉も漸く口を開く。

「そこでだ、真選組 鬼の副長さんとやら。てめえらはどっちについて戦うつもりだ？腐った天人の操る幕府か、それを壊すか…大層頭の切れる副長殿との噂、此処で証明してくれねーかい？」

「高杉てめえが何考えてよーが俺らには関係ねえ…俺達アただ俺達の大將護るだけだ。生憎だがな、幕府に忠誠なんぞ誓った事アねーよ。」

一旦言葉を切り、懷からマヨボトル型のライターを取り出す。行き成り話を振られて若干早口だったのを抑えるように、ゆっくりと煙草を銜え、煙を吐き出す。

「腐った天人共護るだ、そいつをぶっ壊すだ、俺達田舎モンにや関係ねーよ。」

…万事屋、高杉、てめーらはこの国の為に戦った事もあるって話だ。さぞかし幕府を怨んでるだろう、止めはしねー。勿論仲間になるつもりもねえ。

だがまア、幕府が無くなりや俺達ア路頭に迷う事になる。そんな時はてめーら、責任取りやがれ…」

言い捨てた土方は立ち上がり、上着を脱いで部屋を出ていく。

高杉はゆつくりと立ち上がると、土方が捨て置いた隊服を掴む。

「白夜もまだまだ使えるモンだア…まさか銀時、てめーがここま
でとはねェ」

前虎 腐れ縁（後書き）

前門の虎。

高杉さんと銀さんと土方さんの喋りの区別がつかず苦心する様。

後狼 千切た手綱（前書き）

眠いです。更新過多ですかね…

後狼 千切た手綱

「高杉、俺アあんな事言うなんざ聞いてなかったぜ…。てめーは昔から訳わかんねえままだなーオイ。」

銀時が頭を掻きながら半眼で高杉を非難してみせるが、高杉は既に手中の三味線に見入っている。

「あの真選組副長とやら、おめーが気にかけてるだけはあるって所か、意外と骨があるじゃねえか…。」

銀時は頬杖をついて外方を向くが、そうして見遣った先では神威がにこにここと笑っていて引き攣った顔に片手をあてる。と高杉が三味線を弾き始めた。月詠の紫煙を嗅ぐと、目を向ける。

「なあ死神太夫とやら、嘗て桃源郷とまで謳われた遊郭ぶっ壊すなら銀時くらいさ。」

聞けば此処の遊女は皆半ば自分の意思で吉原に残っているらしい…酔狂ついでにどうだい、その百華とやらを鍛え直してみねェか？」

「折角だが遠慮させてもらおう。わっちは単なる自警団…上の事は主らでなんとかしなまし。
そろそろ時間じゃ。わっちは街の見回りがあるから、失礼する。」

「そーかい…店の主人に今夜限りでこの部屋から出ると伝えてくれないや。」

月詠は3人に背を向けて去っていく。一瞬覗いた窓から、細く輝く二十六日月が垣間見えた。

やがて足音も聞こえなくなると、銀時が軽く息を吐いて酒を煽る。

「神威、てめーにや一つ聞きたい事がある。お前、神楽をどうするつもりだ？」

「前に行ってなかったつけ、俺は弱い奴には興味なんてないよ。でもま、近頃はお侍さんのお陰かな？ だいぶ丈夫にはなったようだけどね。」

「んな事聞いてんじゃねーよ。俺と満足な戦いをするためだけに今回の条件飲んだらしーな。じゃあもう一つ条件追加すらア…」

……………

「まあ 落ち着くがじゃ。おんしらもわかっておろー、
今になって天人共を地球から追い出すなんて寝物語にも足らんぜよ。

わしらが目指すべき道は天人排斥じゃなか、お互いに利害関係を結んで対等に手を結ぶ事じゃ。」

坂本が説得を試みるが、取次の方も得体の知れない一商人の言葉を易易と信じる筈もなく、攘夷志士でも筆頭である桂と高杉からの密書を証拠にやっと話を聞いて貰えるようになったのである。

以前に御所から全国へ下った文書にはやはり、天人排斥と天皇国家

の復活が謳われていた。しかし、桂を始めとする革命を目指す者にとって面白い内容ではない。だから白夜叉を使っても先に攘夷志士を集め、天皇側を説き伏せようというのが銀時や桂の考えであった。

とはいえ、御所との交渉である事を考えた場合に、指名手配中であつたり一般市民に過ぎなかつたりする両者よりも、今や大商人である坂本の方が有利であろうと 遙々宇宙より召喚されたのが、坂本率いる快援隊である。

両者の議論は続いたが、後がないのは天皇側というのが明白である。徐々に軟化していく公家の態度に、坂本は内心笑を浮かべつつも緩急をつけ語勢良く相手の堅固な条件を崩していく。

細く長い月が池に映る頃、漸く決着はつき、互いに誓約の文書を作成して取り敢えずは終了した。

「陸奥、これでいいんかの？ わしにはよくわからんぜよ。」

「頭がもたつけば隊は崩れるき、馬鹿いつちよらんと早く報告するぜよ。話ば聞いちやるがはそれからやき。」

無言の二人が歩く道は暗く先も見えないが、確実に前に進んでいた。恐らくこの齒車を止めるものはもう居ない。そう思える程に：

後狼 千切た手綱（後書き）

初長編…あんま終わらせたくないです…

夜船 紙一重の航海（前書き）

遅くなりました＞（「」）＜

夜船 紙一重の航海

細い月の明かりに淡く照らされた白い首筋に、薄き刃が宛がわれる。

刹那の後、白刃にその喉を晒しても動じないどころか、笑みを一層深めた高杉に輝きを失ったかのように見える抜き身の刀が鞘に納まった。

「随分と久しぶりだったのに無粋じゃねーかい、ツラよ」

真顔になった高杉が煙管を離して煙を吐くと、辻の影から固い表情をした桂が姿を表した。鞘に納められた刀を軽く撫でると、胸を反らして高杉を見遣る。

「俺は…今は貴様を信じる。高杉…腐った幕府を駆逐する為には貴様らが必要だからだ。だがその道が正しいとは今も思っていない事を忘れるなよ。」

「フン…今夜はやたら回りくどいじゃねーか。」

周りから見れば一触即発とも言えるような不穏な気配を纏った二人であつたが、短い付き合いではない銀時はそのような空気、気にも留めずに場を荒らす。

「なあおい、んな事はいいいからよお…早く船に乗らねー？ 食事の続き、デザートがまだなんだよなー。」

足取りも軽い銀時を先頭とした一行が夜の花街を抜ける。神威は別行動だ。用心深い桂の意向もあって、此処からは攘夷志士での密談となつてゐるのだ。

ゆらゆらと月の輪郭の頼りなく揺れる水面に浮かぶ瀟洒な小舟：所謂屋形船がゆっくりと川を下り始めた。

「これはこれは桂殿、よくぞおいでなさいました。総督殿と違って私は争い事が嫌いだね…いやー安心しましたよ。」

広間に三人が顔を出せば、まず武市が手を差し出す。桂もそれに自らの手を重ねて軽く笑みを湛える。

「鬼兵隊きつての謀略家である武市殿か…。我々も幕府の崩壊の為に共に戦わせてもらおう。」

「所で桂さん、今鬼兵隊では署名を頂いているんです…はい。是非ココにお名前を、いやついでに仲間の方のお名前も！」

そうです。我々は大江戸青年育成条例に断固反たア…！！」

「うるさいっス！少しはまともな話できないんスか先輩！？
っていうか桂小太郎！晋助様を危険な目には遭わせさせないっスよ
！！あれ、晋助様？」

いつの間にか消えてしまった高杉に、騒ぐ面々の横でお通談議をする銀時と万斉：舟が傾く程荒れた末に舵取りに注意されるのは、それから幾らか経った後であった。

「俺あその曲なかなか悪くねーと思うぜ。」

「それは光栄でござる。だが、拙者はこれの方が…」

「いやね、確かに良いとは思うけどアレ…うちの新八とかにはまだ早いんじゃない？」

穏健とも過激ともつかぬ舟が進む漆黒の河。夜明けは、近い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9721w/>

鬼が嗤った紅い空

2011年11月26日23時46分発行